

子どもの道徳 No.117  
編集：「子どもの道徳」編集委員会  
発行者：長谷川知彦  
発行所：株式会社 光文書院  
〒102-0076 東京都千代田区五番町 14  
電話：03-3262-3271  
デザイン：KINOSHITA DESIGN  
印刷：三松堂株式会社  
2017年（平成 29年）6月15日発行

# 子どもの道徳

No.117

マイハート おおでゆかこ

特集 キーワードで見る 道徳教科書

..... 新宮弘識 / 加藤宣行 / 土田雄一 / 編集委員

..... 加藤宣行

..... 編集委員会

授業実践の紹介・授業協議

..... 加藤宣行 / 青木伸生 / 盛山隆雄



学ぶことが好きになる。  
光文書院

## ◎目次

# 子どもの道徳 No.117

- マイハート おおでゆかこ ..... 1
- 特集 キーワードで見る 道徳教科書
  - ・道徳の「評価」をどのように考えるか  
新宮弘識／加藤宣行／土田雄一／編集委員 ..... 2
  - ・道徳で「いじめ」をどう扱うか 加藤宣行 ..... 6
  - ・情報モラルはこのように授業する 編集委員会 ..... 10
- 授業実践の紹介・授業協議  
加藤宣行／青木伸生／盛山隆雄 ..... 14

本文中の勤務校は、平成29年6月現在のものです。

## ♡ マイハート

# 自分らしさを 生かして



イラストレーター・  
絵本作家  
おおでゆかこ  
〔小学道徳 ゆたかな心〕  
表紙イラストレーター

親の転勤で神奈川に住んでいた小学生時代、絵を描くのが大好きだった私のために、両親は絵画教室へ通わせてくれました。その教室は、“サン・アート”といって、まさしく太陽みたいにキラキラした、意欲の塊のような男の先生がいました。先生の作品自体、キラキラして個性たっぷりでしたが、生徒達にもいつも自由で伸びのびした作品作りを教えてくれていました。先生は決して、「作品はこうでなくてはならない」とは言わず、一人ひとりの個性を大事にしてくれました。私はその教室で、モノづくりの楽しさを学び、自分にしか表現できない作品を作っていきたいと感じたのです。

ある日、「雑誌の切り抜きでコラージュ作品を作る」という課題が出ました。肝心の切り抜きを家に忘れてきてしまった私に、先生は教室にある、ありものの切り抜きでやるよう提案してくれました。それがなぜか許せなかった私は、先生の必死の説得も聞かず、一人泣きながら家へ帰りました。今考えると、なんという頑固娘だったのだろうと先生には申し訳ない気持ちでいるのですが……。その後、先生はわざわざ家の近くまで謝りに来てくださいました。この頃の経験は、私にとって、イラストレーター・絵本作家を目指すことにつながる大きな一歩となったのです。

美術系の大学を卒業し、フリーランスになってからしばらくは、学童保育の指導員やおもちゃ屋さんのアルバイトをしながらイラストを描くという、二足のわらじ生活を送っていました。私は、学童保育の指導員の先生達と、工作教室で作る作品を考え、どうしたら大勢の子ども達にモノ作りの楽しさを伝えられるか試行錯誤していました。子ども達の中には、「自分でやる！」と最後まで人の手を借りずに自分の作品を仕上げる子がいる一方で、「先生がいちばんうまいから先生がやって！」と言う子や、隣の子の絵をそっくりそのまま真似する子、うまくいわずに途中で投げ出す子もいました。自分の意志で、自分にしかできない作品を考え、個性を伸ばしてもらいたいという思

いで始めた工作教室なのに、難しいなあ……と頭を抱えた時期もありました。

フリーランスになり、自ら仕事を見つけ出していかなければならない。そのような状況の中で、心の支えになった一冊の本があります。梨木香歩さんの『西の魔女が死んだ』（新潮社）です。登校拒否になった主人公の「まい」が、都会から離れた森に住むおばあちゃんと「魔女修行」をしながら、自分の居場所をさがしていくというお話です。早寝早起きの規則正しい生活、家の仕事のお手伝い、畑の収穫作業……。それは、まいの精神を鍛える修行でもありました。おばあちゃんは、まいに“急げの心やあきらめの心”に打ち勝って、新しい自分を見つけてほしかったのです。「体力をつけたり、他の能力をつけたりするのと違って、意志の力をつけることの難しいのは、それに挑戦するのが意志の力の弱い人の場合が多いので、挫折しやすいということですね」というおばあちゃんの言葉は、現代社会に生きる子ども達、大人達に向けられたメッセージのように感じます。もちろん周囲の秩序を乱すのはよくないことですが、社会の荒波に飲まれてしまうのではなく、最後には自分の力で、本当の自分を見つけてほしいと思うのです。

今回、光文書院の教科書の表紙に描いた絵は、何よりも“自分らしい”作品になったと思います。この教科書を使った道徳の授業が、自分にしかない“らしさ”を見つけていける、子ども達にとって素敵な時間になること、そして未来につながることを願っています。

おおでゆかこ 1986年生まれ。イラストレーター・絵本作家。書籍や雑誌、絵本の挿絵を描くほか、文房具や雑貨、食品パッケージのデザインを手掛けるなど幅広い分野で活動中。著書に『シロクマくつや』（偕成社）、『すてきなおかし作り』ほかの「はじめて絵本」シリーズ（河出書房新社）、『プレゼント、あけてみて!』（あかね書房）等がある。

Yukako Ohde

道徳ノート 学習履歴図

などを活用した授業実践による評価の実例を多数掲載!

こうぶんエデュシリーズ

● 指導と見取りのポイントが分かる!

新刊 書籍

# 子どもに寄り添う道徳の評価

筑波大学附属小学校 教諭 編著 加藤 宣行

B5判 / 160 P  
定価 2,300円 + 税  
ISBN978-4-7706-1072-0

弊社販売代理店・インターネット・一般書店からご注文いただけます。



■「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひお寄せください。  
弊社 Web ページ「お問い合わせ」コーナー <http://www.kobun.co.jp/contact/>

# 道徳の「評価」を どのように考えるか

加藤 宣行 × 新宮 弘識 × 土田 雄一

道徳の評価をどうしたらいいのか、道徳における評価の意義や、大切にしたいことについてお話しいただきました。

## 道徳は、何を評価するのか

**加藤** 道徳の教科化にあたって、評価はどうしたらよいのでしょうか。今年から前倒しで評価に取り組み始めた学校で、「道徳ノートに記録を書かせているが、ここからどのように評価すればよいのか」という疑問の声があがった」という声も聞きました。今後こういう声は、現場から多く出てくるだろうと思います。

**新宮** 現場では、「作文、ノート、ワークシート、発言や行動の記録、面接等による評価をどうするか」と大わらわのようですが、これは方法論です。大事なことは「何を評価するか」ということであり、そのためには評価の観点が重要だと思えます。

「道徳性の評価」といった場合、まず、人間が人間を評価できるのかという根本的な問題があります。特に、学校における評価は公的な機関による評価になるので、慎重さを要します。

したがって、評価の観点を限定する必要があります。道徳の授業のねらいに子どもをどの程度近づけられたかという評価は、教育として当たり前のことだと思います。このことを前提として「何を評価するのか」と考えたときに、評価する観点を授業のねらいに限定するとよいと思えます。

**加藤** ノートやワークシートからどのように評価するかという方法論ではなく、まずは「何を評価するのか」というところから、ねらいにどれだけ近づけたかという「ねらい」をもとにした評価を考えるべきだろうということですね。

**土田** 私もほぼ同感です。その前に私が大事にしているのは、「何のために評価をするか」ということです。それは、「子どもたちの道徳性の育成」

です。文部科学省からも、個人内評価で、子どもを伸ばすための評価をするという方向性が打ち出されています。

そもそも評価には、総括的評価と形成的評価があります。総括的評価は、今までのいろいろな学びを総合してどのように見取ったのかを示すものです。形成的評価は、学びのプロセスにおける見取りです。教師がどのように見取って、それをどう声かけしていくか。ワークシートや道徳ノートから、この子がどう変わったかを見取るだけではなく、そこに対して教師がどのような言葉を書いて返すか。それが評価なのではないでしょうか。それがなく、わかったかどうかで進めていくと、評価の本来の目的からずれていってしまわないか心配です。

コメントを返すことは中学生にも有効です。教師のコメントを見て、学びの振り返りをしながら生徒が変わっていった場面を目の当たりにして、その重要性を再認識しました。「何のためにやるのか」「教師がどのように関わっていくか」、この2点をぜひイメージしてほしいと願っています。

**加藤** 評価には、「子どもの道徳性を高める」「指導方法の改善・充実を図る」という2つの目的があるということ。授業のねらいが評価の観点になり、ねらいを複数化・具体化し、方向性をきちんともたせることで、子どもに向けた形成的評価ができるということ。そして大事なことは評価のための評価ではなく、子どもに向けたメッセージとして、子どもに返す評価。それこそが子どもを育てる評価になり、子どもを伸ばすための言葉を使っていくことが大切になるということですね。



加藤 宣行

筑波大学附属小学校  
『小学道徳 ゆたかな心』監修



新宮 弘識

淑徳大学名誉教授  
『小学道徳 ゆたかな心』顧問



土田 雄一

千葉大学教育学部附属  
教員養成開発センター教授  
『小学道徳 ゆたかな心』編集委員

## 「ねらい」を評価の観点に

**新宮** 評価の話が出てきたときに、行動評価が話題になったことがあります。できたかできなかったかを評価することは問題だろうという意見が多かったと思います。授業後の子どもの道徳性においても、ねらいを実行しているかいないかという観点から評価したら問題。できているかいないかではなく、実行しようとしているか。このことを間違えてはいけません。

**加藤** 「何ができたか」を評価の観点にすると、行動を取り繕って評価に縛られる子どもになってしまう。光文書院は教師用指導書で、ねらいを複数化・具体化し、「感じる」「考える」「行動する」という観点を掲げています。冒頭の小学校でも、細分化したねらいを立てて授業を行うことで、ねらいにスムーズにつながっていくことを少しずつ実感してきていると言っていました。

**新宮** では、『二わのことり』での評価例を具体的に考えてみましょう。

「あなたは、『友達の気持ちを考えたらじっとしていられない心をもつようになると思います』と発表しましたね。とても大事なことを考えることができて感心しました」と評価する。これは道徳的な理解からの観点を、子どもの発言から捉えた評価ですね。「友達が、じっとしていられない心が大切だと思います」という発言をしたときに、あなたは拍手をしましたね。拍手をしたということは、あなたがじっとしていられない心のすばらしさに感動したからです。あなたはすばらしい心をもっていると思いますよ」と評価する。これは、拍手をしたという子どもの行動を観察し、子ども

が道徳的内容に関して感動したからであると捉えた評価ですね。評価された子どもは意欲をかりたてられるだろうと思います。「あなたは、まとめの学習で、『友達の気持ちをわかることは大切だと思います』と書きましたね。勉強したことをよくまとめました。人の気持ちがわかる人になろうね」と評価する。これは、子どものまとめたノートを参考にした評価。最初は「わかったか」、2つめは「感動したか」、3つめは、「それを自分のものとして受け止めたか」という評価になる。『二わのことり』の勉強のあと、あなたはやさしい心をもっている人の話を読み始めましたね。とてもいいことです。たくさん読んで、心の豊かな人になろうね」と、授業のあとの子どもの生活を観察して、あるいは親からの連絡をもとにして評価する。こういう評価が「ねらいからの評価」だと思います。ねらいをもとに、発言やノートや観察を通して評価していくわけです。

**土田** コメントには、「先生はあなたの言葉をこのように受けとめましたよ」ということを書きたい。通知表は大きくりの評価をするようになっていますが、具体的な場面を書かないと顔の見えない評価になります。この場面で子どもが変わった、道徳性が高まっていたという例は必要でしょう。

**新宮** 具体的に評価しないと、子どもはわからないと思いますよ。

**加藤** 「たくさん発表できました」とか「いっぱいノートに書きました」ではなく、授業での様相や授業後の態度から、その子にしか成し得ない、その子なりの成長を見取る。それを本人に返してあげるのがコメントであり、通知表や要録に具体的に記述することにもつながってきます。



## 評価は子どもとのキャッチボール

**土田** 教師からの見取りと同時に、自分はどうか思ったのかという子ども自身の自己評価も大事です。子どもの自己評価が教師の評価とずれていたときに、それは正しい評価なのかということが出てきますが、教師のコメントによって子どもも自分自身の別の面に気づく。そういうやりとりを積み重ねながら、教師の評価と子どもの自己評価の重なる部分が多くなっていくべきではないかと思えます。それであればこそ、通知表の記述がしっくりきて、自分の成長を実感できるものになるわけです。光文の教科書では、自己評価についても大事にしています。

**加藤** それが教科書の巻末についている「学びの足あと」ですね。

**新宮** 自己評価も重要だし、教師のコメントに対して子どもがどう受け止めたかという反応もまた、重要だと思います。評価は子どもと教師がキャッチボールをしないと本物にならない。

**加藤** 本人が自覚できていないことを意味づけしてあげることは1つの評価だし、それは友達同士でもできます。相互評価という子ども同士がお互いに自己評価能力を高めていくことも、よりよい自分の生き方のために大事なことだと思います。そういう点で「学びの足あと」を使うと自己評価もできるし、自分自身の道徳性についても振り返ることもできるでしょう。教師は授業の度に形成的に評価し、子どもも自分自身の評価能力を高め

ていく。道徳性に対する評価能力を高めることも大事だし、そのための指導方法として、授業ではねらいに対する評価を行い、それをもとに授業改善し、充実させることが必要です。

**新宮** 評価の観点は保護者とも共有すべきだと思います。

**加藤** 道徳ノートがあると、「家の人と話し合いました」「聞いて調べてきました」といった活動が起きます。親にコメントを書いてもらう場合もあり、それも評価につながる情報になってきます。

**新宮** 評価の共有化ですね。

**加藤** はい。そうすると親も学校と同じ観点で子どもを見るようになります。今、道徳ノートは、授業後に回収して何を書いたのかを見る場合、家に持ち帰らせて自由に書き足して使う場合の2パターンを試しています。

**新宮** それが評価の本質でしょう。日ごろ、子どもと教師と親が1つの目標、授業のねらいに向かってどういうふうにキャッチボールをしていくか。それをしていくと道徳の授業も充実します。

**土田** そういうことをやっていけば、家庭も子どもも通知表に書かれた内容に納得できます。どの場面でどのように捉えたのかが子どもも家庭もわからず、わかっているのは教師だけにならないようにすることが大事ですね。

**加藤** 子どもが「しっくりくる」言葉をかけてあげれば、「先生はちゃんと見てくれているんだな」とか、「自分のこういうことはよかったんだな」

と、本当に納得した上で評価を受け入れられる。それが「学びが生きる」「成長につながる」ということでしょうね。

**土田** 先の中学生でも、先生がコメントで自分の考えを認めてくれて、さらにいろいろと質問してくれると、もっと考えようという意欲につながっていました。道徳性の育成とは、自分がよりよくなるよとか、もっとたくさん考えたいとか、そういうものを伸ばしていくことであり、教師のコメントはそこにつながっていく。できたかできないかではなく、これからどうありたいかを考える意欲をもたせるものだと思います。

**加藤** ノートにコメントを書くときに気をつけていることが3つあって、1つめは、その子を具体的に認めて意味づけし、ほめてあげる。「すごいね」みたいな単なるほめ言葉ではなく、「ここはこういう意味があってすごいね」という意味がわかるほめ言葉を使うこと。2つめは、子どもが気がついてない観点に気がつけるような、「じゃあこれはどう思うかな」というようなちょっとした問いかけ。3つめは発展として、「これからこんなこともできるかもしれないね」という、次に向かう促し。この3つのどれかをコメントしようと心掛けています。評価活動は、子どもの継続した学びにつながるものであるべきだと思います。専科なので10クラスの道徳の授業を受け持っていますが、授業や授業の合間の様子で気がついたこと、「こういうことを発言した」「こういう変容

が見られた」といったことを補助簿に書き込んでいます。学期の終わりにそれをまとめてみれば、その子どもなりの記述評価がすぐには書けるようになると思っています。

**土田** 大学生の授業で私もすべてコメントを書いています。線を引いて「いいね」と書くだけでも学生の反応は違ってきます。コメントは年代を問わず意味があることだと思っています。現場の研修会に行くと「文科省はこう言っているけれど、実際どうしたらいいのですか」と、ハウツー的な書き方を聞かれることが大半です。こう書いてくださいと言えば先生方ははっきりするのでしょうが、「何のために評価するのか」というところが置き去りにされがちです。道徳がなぜ教科化されたのか、道徳は何を目指してやっているのかを、きちんと押さえないと、本質を見失った評価になってしまうのではないかと思います。この部分は強調したい。「子どもの成長のための評価」なのだということだけは意識してほしいですね。

**新宮** 目的と観点をしっかりと教師がもつこと。「教師よ哲学をせよ」。それがない教師は、教育者として成長しない。子どもの可能性を評価するといっても、中身の無いほめ言葉が蔓延しては困る。評価例をまねるのではなく、一人ひとりの子どもをよく見て、具体的に書いてほしい。

**加藤** これからも、授業実践を通じて子どもに向かう評価を具体的に探っていきたいと思っています。

### 評価を考えるための1冊



## 子どもに寄り添う 道徳の評価

好評発売中!

編著 筑波大学附属小学校 教諭  
加藤 宣行

- **理論編** では、「何のための評価なのか」という評価の目的・考え方をわかりやすく解説。
- **実践編** では、「ねらい」を評価の観点に授業を展開し、実際に子どもが書いた「道徳ノート」や「学習履歴図」の記述と先生のコメントを多数掲載。
- 毎時間の見取りから、通知表への記入例まで、評価のポイントがわかる必携の1冊!

【執筆陣】  
石隈 利紀 東京成徳大学大学院 教授  
毛内 嘉威 秋田公立美術大学 教授  
松下 良平 武庫川女子大学 教授  
市川 洋子 敬愛大学 教授  
土田 雄一 千葉大学教育学部附属  
教員養成開発センター 教授  
(ほか)

インターネット・一般書店からもご注文いただけます。

# 道徳で「いじめ」をどう扱うか

指導上の留意点と目指す姿

筑波大学附属小学校 加藤 宣行



## 道徳で「いじめ」の何を教えるのか

学校におけるいじめ問題が社会的に大きく注目されるようになって久しい。いじめは昔からある問題だが、現在はいじめを受けた子どもが自ら命を絶つ最悪の事態に発展してしまうケースが少なからずあり、看過できない状況となっている。

「いじめ」に立ち向かうためには、いじめられている子どもを孤立させてはいけない。いじめは許さないという確固たるスタンスを子どもと大人が共有することも必要だ。しかし、単に「いじめはだめだ」と大号令をかけるだけでは、思うような効果は得にくいだろう。だからといって、道徳教育でいじめ問題を取り上げればよいという発想も安易である。

本稿では、いじめ問題に対して道徳教育が何をなし得るのかという観点から考えていきたい。大切なことは、はじめから「結論ありき」のことを押しつけるのではなく、子どもたちに「何をどのように教え、考えさせるか」ということである。

まず、「何を教えるか」であるが、これは大きく以下の3つが考えられる。

- ①いじめはいかに人を傷つけ、誰にもよいことはないといういじめの悲惨さ
- ②いじめを生む原因となる、他者・異質を排除するという人間の心の弱さ
- ③よりよく生きるということにきちんと向き合うこと

次に「どのように教えるか」について、①の「いじめはいかに人を傷つけ、誰にもよいことはないといういじめの悲惨さ」を教え、考えさせることには、価値観の否定と人間の否定を混同しないよう、相当な配慮が必要である。教師は「いじめはだめだ」「いじめを行うような人間は価値がない」という指導を行いがちであるが、人間を否定する

ような指導をすればするほど、子どもたちの弱い心は逃げ場を失う。自分の中にそのような心が少しでもあることを自覚し、自己否定に陥るからである。大人の世界にもいじめは存在する。ましてや、子どもたちはまだ成長段階である。その子どもたちに、大人にもない完璧さを望むほうがおかしくはないであろうか。

②「いじめを生む原因となる、他者・異質を排除するという人間の心の弱さ」についても、①と同様に、自己否定に陥らせないよう配慮する必要がある。他者・異質を認め共存するよさについて、子どもたち自らが気づきを広げるような学習展開にすることが大切だ。

これができれば、自ずと③「よりよく生きるということにきちんと向き合うこと」という価値観にも同期してくるであろう。

## 教科書におけるいじめの扱い

光文書院の教科書では、いじめの悲惨さを直接的に示したり、登場人物（＝いじめを受けた子ども）の気持ちに共感させたり、逆にいじめをしている側の人物の心情を批判的に言わせたりするような扱いはしていない。むしろ、いろいろな仲間が力を合わせて何かに取り組むことのよさを考えさせたり、一人ひとりの命は自分だけのものではなく、たくさんの人々に支えられて生かされているみんなの命であるということに心を動かし自覚したりしていくような展開を心掛けている。「いじめはだめだ」というストレートなメッセージを示すよりも、いじめを生まない仲間のよさについてしっかりと考えさせるようにしているのである。

例えば、2年生に「モムンとヘーテ」という教材がある（p.8-9参照）。これは自己中心的な要求をするヘーテと、自分を抑えて友達のヘーテを受け入れるモムンの話である。心を開き合って最

後には打ち解け合う二人の様相は、いじめと直接的には結びついていない。だが、本質的な人間関係を考え突き詰めるほど、根っこは同じであることに気づくだろう。「相手が何も言わないから遠慮しなくてもいいわけではない」「相手のことをどれだけ考えられるかは自分に課せられた友達観の問題だ」「友達だからといって、相手の都合を優先するだけでなく、自分も言いたいことを言うべき。それが対等というものだ」ということを、2年生なりの言葉で理解していくような展開を提案している。

## どのような子どもを育てるか

もちろん、「いじめはだめだ。許さない」という指導も必要である。しかし、道徳教育は、指導としてそのようなスタンスを示すのではなく、自ら体得する人間を育てるものでありたい。いじめをしてしまった子に注意して反省を促す、消極的な児童生徒指導ではない。子どもたちに、どのような人間観をもてばいじめをしない世界をつくることできるかを考えさせ、自分たちにもそれができるという手応えと理想を抱かせる、積極的な

児童生徒指導を目指したい。

学校は一人で学ぶ場所ではなく、みんなで学ぶ場所です。なかまがいてくれるからこそおびていけることっていっぱいあると思います。

たくさんの友だちがいて、それだけいろいろな意見があるので、ときにはけんかしたりぶつかったりするけれど、そういうことをのりこえておたがいをみとめ合ってつくられた「一つにまとまるぞ」というパワーで大きなかべをのりこえたとき、クラスの人数の分だけ「やったー」というよろこびの気持ちは大きいです。

そんなとき、人ってすてきだな、すばらしいなと思います。ぼくは学校大好きです。これからどんなことがまってるのかワクワクです！！

これは私が担任した2年生のT君の道徳ノートの記述である。このような明るく前向きな人間観、学校観をもつ子どもたちが、いたずらに人を差別したり、排除しようとしたりするであろうか。T君のような、人間愛にあふれた価値観こそが、いじめ問題に対抗する最大の武器になるであろう。

## 小学校道徳教科書「小学道徳 ゆたかな心」いじめ関連教材一覧

| 学年  | 教材番号                  | 教材名             |
|-----|-----------------------|-----------------|
| 1年  | 13                    | ぶうたのやくめ         |
|     | 15                    | ぼくはいかない         |
|     | 22                    | すてきなことば「あふたあゆう」 |
|     | 23                    | はしのうえのおおかみ      |
|     | 31                    | 二わのことり          |
|     | コラム                   | みんなのよいところは？ ★   |
|     | 39                    | さるのおかあさん・サヤカ    |
| 2年  | 8                     | やさい村の子どもたち      |
|     | 11                    | なかよしでいたい        |
|     | 18                    | くつつかくし          |
|     | 19                    | レッドカード          |
|     | 20                    | モムンとヘーテ         |
|     | 21                    | のこぎり山の大ぶつ       |
|     | コラム                   | どんなクラスにしたいかな？ ★ |
| 3年  | 1                     | 友だち屋            |
|     | 15                    | ないた赤おに          |
|     | 23                    | 思い切って言ったらどうなるの？ |
|     | 28                    | うわさ話・つらい気持ち     |
|     | 30                    | 四人五きゃく          |
|     | 31                    | きょうりよくクラス       |
|     | 34                    | お日さまの心で         |
| コラム | 同じいけんじゃないと友だちじゃないの？ ★ |                 |

| 学年  | 教材番号            | 教材名                |
|-----|-----------------|--------------------|
| 4年  | 1               | 貝がら                |
|     | 3               | サッカーボール            |
|     | 11              | ゲームのやくそく           |
|     | 14              | ブラジルからの転入生         |
|     | 17              | 学級新聞作り             |
|     | 20              | 良太のはんだん            |
|     | コラム             | いつも同じグループでいいのかな？ ★ |
| 5年  | 7               | まかせてみようよ           |
|     | 8               | みんなの劇              |
|     | 11              | ガンジーのいかり           |
|     | 14              | ドッジボールを百倍楽しくする方法   |
|     | 15              | 「スイミー作戦」「ガンジー作戦」   |
|     | 16              | 短所も長所              |
|     | 22              | 約束                 |
| コラム | 思い切って言ってみたら…… ★ |                    |
| 6年  | 35              | マララ・ユスフザイ          |
|     | 5               | 陽子、ドンマイ！           |
|     | コラム             | あなたはだあれ？           |
|     | 27              | 森川君のうわさ            |
|     | コラム             | 周りの人を見てみよう ★       |
| 37  | あやまってすむことじゃない   |                    |

★は1～6学年で共通した、「ちびまる子ちゃん」といっしょに友達関係や学校生活を考えるコラムです。

# 道徳で「いじめ」をどう扱うか

## 教材の紹介

### 2年 モムンとヘーテ

- ★主題名  
ともだちを  
おもうところ
- ★内容項目  
B 友情, 信頼



# 情報モラルはこのように授業する

## 道徳科における教材の扱い方とは

光文書院「小学道徳 ゆたかな心」編集委員会

二十一世紀の子どもたちは、求めればすぐに与えられる情報システムと日常的に接して生活しています。しかし、便利さの裏側には必ず便利さゆえの不都合さが隠れていて、スマホの普及に伴って近年さまざまな社会問題が浮き彫りになってきました。そのため現代的な課題としての情報モラル教育は、社会の要請であるともいえるでしょう。しかし学校で指導する情報モラル教育は、「ネットいじめはやめましょう」や「有害サイトに接続するのはやめましょう」「ネット上の情報を鵜呑みにすることはやめましょう」「他人の著作権を侵害することはやめましょう」など、「〇〇するのはやめましょう」というように、子どもの行動を制限することばかりになってはいませんか。

確かに逸脱した行動にならないように、ある程度の制限はしなければなりません。間違った行為は「知らなかった」では済まないこともあるからです。ですが、「だめだめ」ばかりの情報モラル教育を子どもたちは楽しく学ぶことができるでしょうか。また、道徳の学習として情報モラル教育を行っても、実際は情報機器の取扱上の注意になってしまうということはないでしょうか。

一部改正小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編には、「情報モラルと現代的な課題に関する指導」の「情報モラルに関する指導」の中で、「指導に際しては、情報モラルに関わる題材を生かして話し合いを深めたり、コンピュータによる疑似体験を授業の一部に取り入れられたりするなど、創意ある多様な工夫が生み出されることが期待される。」とあります。そしてその後に「情報機器の使い方やインターネットの操作、危機回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼を置くのではないことに留意する必要がある。」とあります。このように具体的操作方法の学習は道徳の学習とはいえません。

また、具体的操作方法の学習ではなくても、「〇〇してはいけない」と禁止事項を教え込むことは、実際は具体的操作の学習と同義であると考えられるのではないのでしょうか。前出の解説によれば「情報モラルに関わる題材を生かして話し合いを深める」という方法が望まれています。何について話し合うのか、それは行為のもととなる部分について考え話し合う、つまり内容項目等によりねらいがはっきりとされている話し合いが「道徳の学習における情報モラル教育」ということとなります。

さて、では教科書にはどのような扱いで掲載されているのでしょうか。教材の内容そのものが情報を扱っている場合もありますが、光文書院の教科書には全学年に「情報モラルのコラム」が掲載されています。このコラムはそれ自体を授業で扱うこともできますが、情報モラルのコラムという性質上、先に述べたような具体的操作上の注意を喚起することに、まず重点を置いて書かれているので、学習の方法によっては子どもの心に残った内容が、「〇〇しないようにしよう」という禁止事項だけが残り、教材でねらう道徳的な学びに届かないことも考えられます。しかし、ここでは道徳として情報モラル教育を取り上げるわけですから、ひと工夫が必要です。授業を行う際には教材で学ばせたいねらいをたてて取り組まれることをお勧めします。

たとえば4年生の情報モラルのコラム「インターネットの落としあな」を例に挙げてみましょう。内容項目からねらいとする価値を「節度、節制」に設定します。そして、

\*やみくもにバナーをクリックすると危険であることがわかる。

\*個人情報の大切さがわかり、子どもにとって有害なサイトにはかかわらないことの大切さがわ

かる。  
\*自制心を持ち、先のことを考えて行動しようとする。

このように教材と同様な具体的ねらいを立てます。本コラム・教材では、有害サイトの危険性について取り扱っています。情報モラルのねらいとしては「有害サイトにはかかわらない」と「個人情報の重要性」ですが、「少くくらい大丈夫だろう」という自制心の脆弱さが後から困ることを招いてしまうという点に注目し、だれも見えないときこそ自分を律して踏みとどまる必要性がわかり、よりよく生きていくためには自分を律していくことが大切であると気づかせ、自らの態度を改めようとする方向へ導くことができます。

また、このように本教材を単独で使用する場合も考えられますが、「節度、節制」の内容項目で同じ第4学年教材18「心の体温計」と共に使用

する方法もあります。「度を越さない生活」のよさと「度を越してしまうことによる害」を比較して考えさせるには効果的です。他にも、同36「心のブレーキ」と共に取り上げて「よくないこと」とわかっていても行動してしまうことがある人間の心の弱さを取り上げて、考えさせることも可能です。一時間に二つの教材を取り入れる場合には、二つの教材の共通する部分を主たるねらいに設定し、具体的なねらいを立てます。それぞれの教材にかける時間配分に注意して取り扱いますが、情報モラルのコラムにかける時間を少なめにすることがコツでしょう。

「〇〇してはいけない」というきまりを教えることは大切です。しかしきまりの理由を学び、自己を見つめた深い話し合いによる内面の育ちは、確実によりよく生きようとする態度へと反映されていくことでしょう。

## 小学校道徳教科書 「小学道徳 ゆたかな心」 情報モラル関連 教材一覧

| 学年 | 教材番号 | 教材名                     |
|----|------|-------------------------|
| 1年 | コラム  | ネットマナーとはなんですか           |
|    | 24   | ルールがないとどうなるの？           |
| 2年 | コラム  | ネットマナーをみにつけましょう         |
|    | 26   | おかあさんとのやくそく             |
| 3年 | コラム  | インターネットのじょうほうはかならず正しいの？ |
|    | 28   | うわさ話・つらい気持ち             |
| 4年 | 11   | ゲームのやくそく                |
|    | コラム  | インターネットの落としあな           |
| 5年 | コラム  | だれの研究？                  |
|    | 22   | 約束                      |
| 6年 | コラム  | スマホと上手に付き合うために          |
|    | 18   | あなたはだあれ？                |
|    | コラム  | 携帯電話やスマートフォンの使用時間       |

# 情報モラルはこのように授業する

## 道徳における教材の扱い方とは

### 4年 情報モラルコラム インターネットの落としあな

★内容項目  
A 節度, 節制



**18 心の体温計**

「ひろと、テレビゲームばかりして、  
ないで、少しは勉強しなさい。」  
「ひろと、テレビばかり見ていないで、  
あしたのじゅんぎはできたの？」  
母の言葉が、ぼくにどんどんあびせ  
られる。  
「今からしようと思ったのに……。」  
お母さんに言われたら、やる気が  
なくなった。」  
ぼくの口ぐせである。

度がすぎないために  
あなたほぼぼの生活の中で、「度がすぎる」の境を  
書かれたことありますか。「度がすぎる」とは、  
「たいへん」とか「おそろしい」とか、  
「やばい」とか「おそろしい」

24

あなたにも、ひろとさんと  
同じような気持ちになった  
ことがありますか。

**36 心のブレーキ**

「今日、くぼ坂の下の公園で遊ぼう。」  
ぼくは、学校でたかし君とこうたろう君をさそった。  
「うん、いいよ。」  
「たかし君が言うよ、こうたろう君も。」  
ど、たかし君が言うよ、こうたろう君も。  
「うん、いいよ。」  
と、たかし君が言うよ、こうたろう君も。  
「うん、いいよ。」  
と、たかし君が言うよ、こうたろう君も。  
「うん、いいよ。」  
と、たかし君が言うよ、こうたろう君も。  
「うん、いいよ。」  
と、たかし君が言うよ、こうたろう君も。

160

**インターネットの落としあな**

ある日、けいたさんは、インターネットで動物の動画を見ていました。  
すると、画面に  
**「動画をクリップ！」**  
という大きな文字がでてきました。「何だろう」と思って、けいたさん  
がその文字をクリックすると  
**「会員登録をしてください。」**  
という画面にかわりました。こまったけいたさんがお父さんに相談する  
と、  
「けいた、『有料』というのはお金がかかるということだよ。つまり、  
ここから先は大人向けなんだ。インターネットにあるのは、子ども向  
けのウェブページだけではないから、少しもおかしいと思ったら  
やめることが大事だよ。」  
と、教えてくれました。

次の日、けいたさんは、インターネットで社会科の宿題の調べものを  
と書いてあるのを見つけて、クリックしてみました。  
**「ここに名前・住所・メールアドレスを入力してください。」**  
これを見たけいたさんは、無料だから大丈夫だろうかと思ってい  
ましたが、お父さんの「少しもおかしい」と思ったらやめることが大事」と  
いう言葉を思い出して、その画面を閉じました。  
夕食のとき、このことをお父さんに話しました。すると、お父さんが、  
「けいた、いいはんだんだね。もう少しして、知らないところからた  
さんのメールが送られてくることだってあったよ。」  
と話してくれました。

!!  
インターネットには、無料で使える「ペーパーなウェブページ」がたくさんあります。しかも、  
子どもが見てもいいページもたくさんあります。でも、お金のたまるウェブページもたくさん  
あります。インターネットを利用するときには、へんたなウェブページには、  
先の内容にまなびがた  
りません。そして、「こまった」ときには大人に相談しましょう。

64

**無料プレゼントが出るチャンス!**  
と書いてあるのを見つけて、クリックしてみました。  
**「ここに名前・住所・メールアドレスを入力してください。」**  
これを見たけいたさんは、無料だから大丈夫だろうかと思ってい  
ましたが、お父さんの「少しもおかしい」と思ったらやめることが大事」と  
いう言葉を思い出して、その画面を閉じました。  
夕食のとき、このことをお父さんに話しました。すると、お父さんが、  
「けいた、いいはんだんだね。もう少しして、知らないところからた  
さんのメールが送られてくることだってあったよ。」  
と話してくれました。

!!  
インターネットには、無料で使える「ペーパーなウェブページ」がたくさんあります。しかも、  
子どもが見てもいいページもたくさんあります。でも、お金のたまるウェブページもたくさん  
あります。インターネットを利用するときには、へんたなウェブページには、  
先の内容にまなびがた  
りません。そして、「こまった」ときには大人に相談しましょう。

65

# 授業実践の紹介

## 「きょうからともだち」

筑波大学附属小学校 加藤 宣行

※平成29年2月11日「KTO公開授業研究会」で行われた実践です。



### 1. 教材について

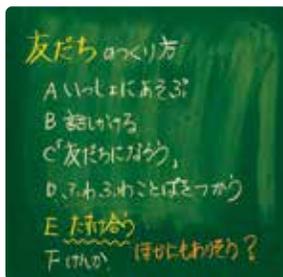
本教材は、道徳副読本『ゆたかな心 新しい道徳』2年生に収録されている、主に「友情、信頼」という内容項目を学習するために書かれた読み物教材である。

ある秋の日、仲よしのコスモスのこうちゃん、彼岸花のひいちゃんの近くに、背の高いススキのすうちゃんが見えた。ススキが背伸びをしているから、とんぼさんも来なくなってしまったとふくれるこうちゃん。それを聞いて「じゃまをして、ごめんね」と謝るすうちゃん。遠い野原から来たすうちゃんは、背伸びをしたら故郷や友達が見えるのではないかと思った、と悲しそうな声で答える。そんなすうちゃんに対し、今日からみんな友達になろうと提案するひいちゃん。こうちゃんも、すうちゃんと握手をし、「よろしくね」と受け入れるという教材である。

本時では、昨日まで友達ではなかったものがなぜ友達になれたか、というところで、友達になれる、なれないというのは、自分の相手に対する心構え次第ということに気づかせるとともに、こういう友達だったら、自分と異なる人がいてやっぱりいいんだなというところに考えをもってもらいたいという思いで授業をした。

### 2. 授業の実際

- (○は教師の発問 ・は児童の発言)
- 友達ってどうやったらつくれると思いますか。
- ・いっしょに遊ぶ。(A)
- ・話しかける。(B)
- ・「友達になろう」と言う。(C)
- ・ふわふわ言葉を使う。(D)
- ・助け合う。(E)



- ・けんかをする。(F)
- なるほど、こういうことができれば、友達ってつくれるのかな。今日のお話を読んで考えてみましょう。
- <「きょうからともだち」を読む。>
- 確かにみなさんが言ったように、ひいちゃんがふわふわ言葉で「友達になろう」と言ったら、友達になることができたね。
- ・うん。
- でも、初めはちょっといやな感じになってたね。もし、みんながすうちゃんと同じ種類の花だったら、初めからすぐに友達になれたのかな。
- ・いや、そんなことはないと思う。
- ・みんな違うから、ほめ合ったり、助け合ったりもできる。
- でも、違うから嫌なこともあるのではないかな。
- ・違うからおもしろいこともたくさんあると思う。
- ・自分だけではできないこと、二人だけではできないことも、三人いればできる。
- ・支え合いがあればね。
- ・だからこそ、けんかもするけれど、そこから仲直りすることが大切。
- 違うからこそ支え合って、けんかしても仲直りしようという気持ちが大切なんだね。
- すうちゃんとこうちゃんは、友達になろうと言う前と言った後では何が違ったのかな。黒板に出て書いてごらん。

### 3. 考察

- ・相手のことがわかってきた。
- 相手のことがわかると、自分の意見と友達の意見を合わせて新しい自分の考えをつくることができるんだね。
- ・こうちゃんも、ひいちゃんのおかげで新しい自分の考えをつくることができた。
- ・うん、「キョウカラトモダチ」とロボットのように言うだけでは意味がない。
- なるほど、相手のことをわかっていく気持ちがないと、どんなにいっしょに遊んだり、「友達になろう」と言ったりしてもだめなんだね。
- ・そう。
- そうやって違うからこそ相手のことをわかっていくとして、支え合っていくとどんな友達になれるかな。
- ・本当に仲のよい友達になれる。

登場人物の気持ちを問うのではなく、どのような心を使うと、自分と異なる存在を受け入れ、よりよい人間関係を構築できるようになるかを考えさせた。そのための手立てとして、いがみ合っている場面と、打ち解けた場面との比較を行ったことは有効であった。子どもたちに、ただ単にいっ



しょに遊んだり、話しかけたりするといった行動をとるだけでなく、その行動のもとの心について考えさせることができた。

本授業実践を、筑波大学附属小学校のお2人の先生に見ていただき、加藤先生を含めた3人で協議をしていただきました。



Nobuyuki Kato

加藤 宣行

筑波大学附属小学校教諭(道徳)  
『小学道徳 ゆたかな心』監修



Nobuo Aoki

青木 伸生

筑波大学附属小学校教諭(国語)  
教育出版国語教科書 編集委員



Takao Seiyama

盛山 隆雄

筑波大学附属小学校教諭(算数)  
教育出版算数教科書 編集委員

協議の内容については次ページから→

加藤先生の授業を見て

**青木** 読み物教材をどう読み、道徳的な心の学びにどうつなげるかという話かと思う。こうちゃんとひいちゃんは、もう友達関係ができています。そこに異質なすうちゃんが存在が出てきた。この子をどうするの、というのがこの教材のポイントだと思う。授業の中で、ここを前提にした話し合いではなくなくなってしまったので、結局は子どもたちが抽象的な美しい言葉でしか語れなくなってしまった、と私は思った。

**盛山** この教材の中盤に、「こうちゃんは思い切って声をかけました」と書いてある。普通に、「声をかけました」ではない。何か思い切らなくてはいけなような、文脈やシチュエーションがあったはず。こういうことを子どもたちに考えさせていくと、すうちゃんの「じゃまをして、ごめんね」と相手に迷惑をかけたことがわかって、正直に謝るという行為が前にある。そういう態度を見たから、思い切って声をかけることができたのかもしれない。話しかけるという行為に、どんな意味があるのか、どんな文脈の中で言うことができるのかをよりよくわかっていく。そういうことが今日の目的じゃないかと、教材を見て思った。

**加藤** 「友達になろう」という言葉は、どこから出ているのか。背が高くて、ちょっと自分とは違うなと思う時点で、気に食わないというか、異質を排除しようとする心が動いている。その心に正直にしていた声がけ前の場面と、声をかけて友達になった場面の違いについて考えさせたかった。相手に対して、この人は自分とは違うという認識をちゃんともった上で、この人が自分とは違うから嫌だと壁をつくるのではなくて、この人はどういう人なんだろうかと興味をもったときに、初めてお互いが寄り添える。言葉がけでは寄り添えない。

**青木** そこが私と違うところ。

**盛山** 私も違った。仲よくするコツの一つは、迷惑だな、嫌だなと思っても、理解しようとして、まず相手のことを尋ねることじゃないかと私は思う。もう一つは、すうちゃんの謝るという行為自体も仲よくするためのきっかけ、コツだと、そういうふうに私は解釈している。

**青木** すうちゃんから初めて聞いた声が「ごめ

んね」だったから、こうちゃんが「どうしてそんなに背伸びしているの」と問う気になった。話の展開の中で、なぜそのセリフが生まれたのかという状況を確認することで、だんだん受け入れられていくことが、子どもたちの中にわかっていく。そういう過程を踏むことがこの話を読むことの大事なポイントなのではないかと思う。今日は、その状況の把握が子どもたちの中で十分ではなかったのではないか。

**盛山** 私もやはりすうちゃんの一言目、「じゃまをして、ごめんね」というのが最大のポイントだと思う。

**加藤** それは読めばわかることではないか。読解力があればできること。それでは道徳の授業はいらないということにならないか。私はこの教材の中で、だんだん仲よくなっていくとか、相手のことがだんだんわかってきたら仲よくなるということについては、自然に読み取れると思った。「どこから友達になったの?」と聞いたのはそういう意味もある。あとは、「ひいちゃんとかうちゃんばかりいっぱい居たら仲よしグループになるの?」と聞いたのもそういうこと。その発問に対して子どもたちは「そうじゃない、すうちゃんがいるからいいんだよ」とは言ったが、そのひいちゃんとかうちゃんだけの世界と、すうちゃんが加わった世界の違いは何か?と問うことで、こうちゃん自身の友達観が変わったというところを、子どもたちに気づかせたかった。

**青木** こうちゃんの友達観は、なぜ変わったのか。

**加藤** それまで自分の世界だけにいたが、異質なものが入ってきたときに、それに前向きにかかわろうとしたら、見えてきたものがあった。そのきっかけは、盛山先生が言っていたすうちゃんの謝罪だろう。ただ、「そこで謝ってきたから仲良しになれたね、謝らなかったらどうだったんだろう」という発問ではなく、「こうちゃんの友達観はどう変わったのか」というのを2年生レベルの言葉で聞きたかった。

**青木** 2年生レベルで考えさせるなら、話の中に戻ったほうがよい。仲よしのひいちゃんやすうちゃんに対してフラットだから、友達になろうよと言った。ひいちゃんやすうちゃん存在はすごく大きい。ひいちゃんがフラットな心情で、素直にすうちゃんに話しかけて、なおかつ、こうちゃんにいいでし

よと念を押して呼びかけたからこそ、三人が仲よくなれた。この具体的な状況を、この教材を通して考えさせることで、「君たちもどう?」と子どもの生活に返してあげることが、この教材を読むことの意味だったのではないかと思う。

**加藤** 国語的な視点ですね。確かにひいちゃんやうちゃん存在というのはキーになるかもしれないが、ひいちゃんはある意味、自分をあまり出していない。自分をいちばんぶつけているのはこうちゃん。すごくケンカしたり、仲が悪かったりした子たちが急に親友になることがある。表面的に取り繕う人間関係よりも、お互いをぶつける中でわかり合った上での友達関係のほうが深いと思う。そういう様相を表しているのはこうちゃんではないか。

**青木** 確かに大きく話の中で変わったのはこうちゃん。ただ、こうちゃんを変える人物としてひいちゃんが描かれているのだから、ひいちゃんの大切さもとらえたほうがよいのでは。

読み物教材を使って学ぶ道徳とは

**盛山** 今日の授業では、加藤先生の発問が多様に及ぶ中で、子どもたちは加藤先生のやりたいことを一生懸命探っているように見えた。

**加藤** 自分としては、相手も自分と同じようにいろんなことを一生懸命考えているのだから、それをちゃんと受け止めて、相手を尊重するという前提がなければ、友達になるためのどんな行動も成り立たないよというところを気づかせたかった。

**盛山** ということは、異質なものと仲よくするためには、相手のことを認めるという前提がないと、通用しないということか。

**加藤** そう。違うからこそいいということに気づかせたい。同じ異質でも、そこがいいねと言えるか、それは嫌だねと言うかの判断基準が、子ども自身の中の友達観。それを多面的・多角的に見

たときに、自分のものさしだけで見ていたら、この人はこういう人、という見方しかできない。だけど違うものさしを入れることによって、ああそれいいね、そこから新しいものが見えてくるね、となる。それがいちばん大切という方向性を考えていた。

**盛山** 異質なものを受け入れようとする心をもつ、ということか。

**加藤** そう。

**青木** 加藤先生の言いたいことはわかるが、それを考えるときにどこまで教材をもとにして、どの時点で自分の生活に返すのか、子どもがはっきり区別をつけられなかったのではないか。

**加藤** それはわざとそうしている。これまでの道徳は、表面的な行為・行動の読み取りの訓練・再確認で終わってしまうことが多かった。登場人物はこうだったね、じゃあみんなも同じことある?と聞いて、「謝ったら許してもらえて仲よくできた」という自分の生活に振り返らせるだけでは意味がないと思う。だからそこで、今から自分のこと考えてもらえ、ではなく、どうしてこうちゃんとすうちゃんはこういうふうになり合えて、仲よしになれたのかな?と問いかけて、こういうところがあるな、それをしたら自分たちもきつと……、と自然に自分を語り始めるのが、本来目指したい姿かと思う。

**青木** そのもとはこの教材がきっかけになる。

**加藤** そう。ただこの教材から学ぶのではなく、きっかけなので、どこかで教材から離れて然るべきだと思う。それは教材をないがしろにするという意味ではなく、教材をきっかけにして、新たな気づきがあったら、書いていないところまで気づき始めて、ここには書いていないけど、きつとこれから……と考えが広がっていく。そのような道徳教育を目指したい。



→より詳細な協議の内容については、光文書院 WEB サイトにて公開しています。



光文書院  
検索